

『塔』

その塔は森の中に忽然と建っていた。唐突に、しかし不自然ではない。

何十もの幻覚魔法に守られ、情報屋に大金を支払い正確な場所を心得ていたポルメリアでも、何度か惑わされて森の中を三日は彷徨った。

そこは名高き魔術師バラウダの塔だ。

偏屈な人物で誰にも従わない。しかし自分が開発したとんでもない呪文や、魔法の道具を高値とはいえ売り払う。

普通の魔術師はそんな事はしない。自分が造り上げた呪文は自分の為だけに使うし、魔法の道具も依頼がなければ他人の為に、たとえ大金を積まれても手放す事はない。

それだけなら奇矯な魔術師で終わるのだが、彼は目的の為に手段を選ばなかったし、自分以外の何者がどうなるかと知った事はない、という利己主義者でもあった。

現にこの辺りでは人間、エルフ、ドワーフ、ノームの区別なく、

恐らくゴブリンやオークといった悪に仕える者たちも神隠しにあっているのだ。そして二度と戻らない。

幼い子供、愛する夫、妻、友人を失った者たちの諦めと嘆きの声が響いている。ポルメリアがバラウダの塔を探す理由は十分だ。

塔は無愛想に建っていた。フードとマントを背に背負った魔法のザックに収め、浮遊盾を取り出す。

金色の三つ編みを重々しくなびかせる。乳白色の肌に緊張が漲り、珊瑚色の唇が横一文字に絞られる。

清冽な藍色の瞳が、不吉な塔を睨んだ。

小柄な体格に不釣り合いな大剣を、宣誓式のように構え彼女はいつもの言葉を唱えた。

「夢もなく恐れもなく、ただひたすらに剣をもて悪を討つ」

不思議な光沢を放つ鎧の上に、スカートのような丈のサーコートを羽織っている。それをなびかせながらゆっくりと進む。

やがて視界に塔の正面入り口に立つ像が見えてきた。

恐らくそれが魔術師の門番なのだろう。そう見定めると、ポルメリアは一気に加速した。

像は彼女の姿を感知して起動する。許しなく塔に近づく者はこれを排除せよ。これが創造主たるバラウダの命令だ。

しかし像の動きは余りに緩慢だった。力を強いかもしれない。だがポルメリアの足の早さを見誤ったのだろう。

一気に間合いを詰めた彼女の一撃は、たったそれだけで像を粉碎した。

彼女の名前はポルメリア・ランキン。

またの名を『城砦落とし』。

恐れなく『悪』を粉碎する者。

バラウダは自分の書齋で記述の真つ最中だった。

昨日までに行った実験結果を早急にまとめ検証しなければ、次の実験、研究に移れない。書類と本に埋もれた小汚い部屋だが、その主は研究にだけは熱心だった。

最前から彼の客となつている赤毛の少年など、まったく眼中にないようだ。

初めは金色の瞳に好奇心を輝かせて、半ば埃に埋もれた本棚を見ていた彼だったが、そのあまりの乱雑さと汚さに辟易し始めていた。

少年は積まれたままあまり顧みられていない本の山に腰を降ろす。

「ねえ、どうなんですか？悪い提案ではないと思うんですけどねえ」

少年はそろそろこの汚い書齋に飽きてきた。先ほどの提案の返事をもらつて、とつとと退散したいようだった。少しばかり投げやりな感じだ。

バラウダは一見すると貧相な男だ。櫛が通っていない鳥の巣のような灰色の髪と、ドのきつい眼鏡ばかりが印象的だ。とても優秀な魔術師には見えない。ただのうだつの上がらない研究者にしか見えない。

だが、頭の中身はうだつがあがらないどころではなかった。

「数千人単位の人の魂をエネルギーに転換して、それを元に地獄の釜を開けろ、というのか」

昨日のメモと記載している羊皮紙の分厚い本から一時も目を逸らさず、彼は少年の言葉を復唱した。少年はおどけて答える。

『さすれば地獄の諸君主より力を授からん』ね、悪い話じゃないでしょ？」

「何処が？」

反対に尋ねられて少年は詰まった。そして慌てて言う。

「いい話ではない？」

「少なくとも、僕にとってはどうでもいい話だな。いや、却って迷惑だ」

「そうですか？僕には貴方は、この世を憎んでいるように見えるんだけどなあ」

「お眼鏡違いというものだ。僕はこの世に大変満足しておる。認められた自分の才能にも、そして実験体に不足ない世間にも」

「……結構変質的に殺していると思うけどなあ」

少年の言葉によろやくバラウダは反応した。瓶底眼鏡の奥で少年を睨む。少年はお愛想笑いを浮かべた。

「変質的とは失敬な。実験的だと言ってくれ。どのような呪文がどのように作用し、相手がどのようにして死に至るのか。それを克明に調べあげる事こそ、新しい呪文を得る近道なのだ。何においても実験は必要だ。そうじゃないかね？」

「まあ、否定はしませんがね」

少年は微笑みを浮かべた。しかしバラウダのように必要だから実験するという気持ちは彼にはない。

実験体と称して付近の住民を人間だろうとエルフだろうとドワーフだろうと、ゴブリンだろうとオークだろうと捕まえては殺しているバラウダである。

自らの行為を学究と称し、悪い事をやっているなどと微塵も考えていないバラウダは、確かに稀有で賞賛に値する精神構造の持ち主だった。

十数回殴りつけた末に、『城砦落とし』ポルメリア・ランキンは扉を破壊し塔内に侵入した。慌ててバラウダは席を立ち、書斎から居間へと急いだ。

「こうしちゃおれん。塔内の警備用木偶を止めなければ」

「どうしてです？」

「勿体ないじゃないか！あいつは『城砦落とし』なんだろう？天使の眷属で恐れ知らずの疲れ知らずだ。あんな奴と儂の木偶を喧嘩させたら被害が増えるばかりだ」

「じゃあ、ここまで通してしまっんですか？」

「準備もできていないのに、敵をここまで入らせる訳はなからう！畏で足止めするわい」

居間の机にある何かスイッチを入れる。それでバラウダの警備用木偶人形は機能を停止するらしい。

その間にも塔内に潜入したポルメリアは動き回っている。中に入って最初の扉のノブに触れた途端に電撃を受けたようだ。しかし彼女は平気な顔でノブを回している。鍵が掛かっていて開かない。

となると、またぞろ大剣で壊しにかかる。それを感覚的に見ているバラウダは、またもや悲鳴を上げた。

「なんで鍵を使って開けるという発想がないんだ！」

「障害は実力を持って排除する、っていうが彼女のポリシーみたいですよ」

先日のランズベールの城での出来事を思い出す。

あの時も彼女は、手向かう兵士たちを、一人残らず殺してから城主の部屋に向かってきた。要するに、他に手がないのだ。呆れるほどに愚直で真つ正直な行動だった。

「やれやれ、因果な奴に見込まれたもんだな。森の奥深く、静かに魔法研究をしている儂をよりによって殺してくるとは」

「・・・そうかなあ・・・」

思わず少年の本音が出た。

「何か言ったか？」

バラウダが振り返り睨みつける。少年は慌てて首を振った。

「いいえ、何にも・・・」

「ふんっ！殊勝な顔をしようって。お前が単なる使いっぱしりでない事ぐらい、儂にはお見通しだ。

ええ？地獄の先触れ、『ワーム』くんよ。確か三年前、ノーベスティア伯爵領を壊滅させた赤い龍がいたな。

執拗に街や村を焼き払い、おかげでノーベスティアは無人の荒野となってしまった。

ワームは長虫であり成長した龍の別称でもある。

赤い髪に金色の瞳、人を食ったふてぶてしい態度・・・それと関連付けるのは無理があるかね？」

魔術師の質問に少年『ワーム』は一瞬考え込んだ。しかし再び会心の笑みを浮かべてこういった。

『「城砦落とし」を殺す事が交換条件なら、いますぐ喜んで実行しますけど」

「お断りだ」

「あら」

「この塔の中で龍に暴れられてたまるものか。貴重な実験資料や素材が全てダメになってしまう・・・つつ、強引に扉を開けよって・・・」

監視魔方阵を通じて見えるボルメリアは、電撃を放つ扉を強引にこじ開け先に進む。だがその扉の向こうは落とし穴になっている。底には鋭い刃が植えられている。死ななくても重傷間違いなしだ。彼女は見事にそれにはまった。肉を裂く音が落とし穴に響く。

ワームはちょっと歓声を上げたが、バラウダは気にもしていないようだ。

「死んだかも知れませんか？」

希望的観測をワームは口にする。だがバラウダは遥かにシビアだ。

「ああいう手合いに落とし穴は最適だ。何故だか解るか？」

「さあ？」

「鎧が重たくてなかなか穴から出られないからだ。これで随分と時間が稼げる」

「でも、『ザシュッ』とかがて音がしましたよ。あれならかなりの深手じゃないんですか？」

『「城砦落とし」とはどんな奴だ？」

いくつかの魔法の道具を用意し、自分の身に装備しながらバラウダは問うた。ワームはやや考える。

「・・・バカ？」

「そうだな。そのとおりだ。何でバカなのか？善なる軍神の加護で電撃、冷気、石化は効かないし、初歩的な呪文は一切受け付けない。毒にも強いし、恐怖も感じない。

たとえ高レベル呪文であろうとも抵抗してケロッとしている手合いだ。しかも高速治癒能力も持っている。

ちよつとした怪我なら時間とともに治してしまう。罨なんか時間稼ぎにしかならんよ・・・本当なら罨も停止したいところだ。馬鹿馬鹿しくて罨の浪費にしかならんからな。つまり、滅多な事では死なないからバカをやっつけていられると、そういう訳だな」

バラウダはうんざりした顔をしている。ワームもうんざりしている。

「不死身なんですかねえ」

「そうじゃないさ。単に死にくいだけだ。そうじゃなかったら・・・」

「なかったら？」

「儂や尻尾まいて逃げる」

ワームは真面目な顔でそう言い切ったバラウダを笑った。

「なるほど。いい考えた。今からでも遅くないから、そうしたらどうです？」

「愚かな考えたな。奴は死にくいだけで死なないわけじゃない。ちゃんと手は考えている」

そうしている間にも二人の感覚には落とし穴から這い出てきたポルメリアの姿が見えていた。

派手な音がした割には血糊が少ない。怪我の跡さえも見えない。

穴から出てきた彼女は、畏にかかった事を気にした様子もなく、剣を手に、浮遊盾を従えて走り出す。

扉にあえば躊躇なくノブを回し、押したり引いたり、引き戸なら横に縦に引き、その間にも何度か毒針だの、仕掛け矢だの、槍だの、色々な畏に引っかかったが、全部まともに受けて平気な顔をしていた。

確かにバラウダの気持ちも解る。畏の仕掛けとてただではないのだ。

それをこும்簡単に踏みにじっていければうんざりしてくる。

バラウダはいくつかの巻物と道具を手にする移動した。ワームもそれについていく。行き先は殺風景な広間だった。石造りの空間が広がっているだけである。だがその中央には巨人サイズの鋼鉄の木偶が立っていた。

「立派なもんですねえ」

ワームは感心する。一目見ただけで木偶のできればえが解る。入り口の番をしていた奴など、これに比べれば雑魚だ。

「儂の手持では、『城砦落とし』と互角以上に殴り合えるのはこいつぐらいだ。

こいつをネタにして畏を仕掛けるしかあるまい・・・ん？」

巨大な鋼鉄の木偶の用意を始めようとした時、バラウダが気持ち悪く笑みを浮かべた。ワームは彼が何を見て笑ったのか知った。それは、監視魔方陣から送られてきた、ある薄暗い部屋に入ろうとしているポルメリアの姿だった。

暗闇でも見通せるのか、彼女の足に躊躇いはない。その様子を見届けたバラウダは、まだ笑っていた。

「よしよし、幻惑の部屋に入ったな。ここならあのバカ娘も少しは堪えるだろう。いい時間稼ぎになる」

「幻惑・・・精神攻撃ですか？」

「まあな。開き直った人間には効きが薄いが、あれはほんの小娘だ。思い惑う年頃だから効果的だろう。さて、儂も準備をしなけりゃならん。とつとど帰れ」

バラウダの冷たい言葉に、ワームは肩をすくめた。

「はいはい、解りましたよ。今は退散いたします。しかし、もしも貴方の気が変わったら呼んで下さい。地獄の使者は喜んで貴方をお迎えにあがります」

ワームはおどけた様子で大仰なお辞儀をして、その場から消え失せた。バラウダはその様子を胡散臭そうに見た。ここは彼の塔である。幾重にも空間転移を禁じる魔法がかかっている筈なのに、それをものともせずワームと名乗る赤毛の少年は去っていった。

彼にはワームの正体が薄々わかっている。それでも虚勢を張っていたのだ。アレは人の手が届くような存在ではない。地獄の底で踏ん反りかえっている諸君主たちの中で、アレに匹敵する者が一体どれだけいるのだろうか？

「まあいい。再びアレと会うのは『城砦落とし』を倒した後か、それとも死んだ時か、二つに一つさ」

『悪』に仕えるつもりは毛頭なくても、自分の所業が『善』にとって受け入れられるものでない以上、死んだ後の行き先はバラウダにも想像がつく。その事を後悔する事はない。

生きているうちはこの世の心配をすればいいのであって、死後の事など死んだ後に考えればいいのだと悟っているからだ。

「だが、死ぬのは『城砦落とし』の方がな」

バラウダは再び低く笑った。細工はりゅうりゅう、仕上げはごろうじろ。彼の笑い声が虚ろな広間にこだました。

☆

その部屋はどこかおかしかった。

はつきり言ってポルメリアに見通せない闇は、魔法的に作られた暗闇だけだ。

光の下にあるように見通せるわけではなかったが、完全な暗闇に包まれる事は、まずない。

その部屋は最初から暗闇の中にあつた。ほんの少しの先も見通す事はできない。

彼女が発する天界の淡い光も吸い込まれてしまうようだ。しかし他に道はなかった。

塔の中の仕掛けを調べる事ができる凄腕の盗賊なら、あるいは他の道を見つけ出す事ができたかも知れない。

だがポルメリアにできる事は、ただただ敵を粉碎することのみである。

障害にぶち当たれば、これを破壊する事より他の手立てを知らない。

しかし闇となると勝手が違う。何かあるのか？何処へ行くのか？さっぱり解らないのだ。

暗闇に切りつけたところで何がどうという事もない。

とはいえポルメリアは考えなかった。ここは敵地。戦いの場だ。悩むよりも進むべきなのだ。足を止めたのは一瞬だけ。

彼女はすぐにも部屋の中、奥深く入っていった。

足元は今まで歩いてきた塔の中と同じで、なめらかな石畳だった。

何かが置いてあるという事も、何かが行く手を遮るといふ事も、そして何者かが襲い掛かってくるという事もない。

やや拍子抜けではあつたが、畏はもとより敵もない方がいい。そう思つて歩き進める。

しかし、自分の事ではあるが、我ながら畏にかかりまくりであつた。

大半の畏が彼女に致命傷を与えるものではなかったから問題にもしなかったが、

普通の人間ならば命がいくつあつても足りないところである。

人の姿でありながら天使の能力、ある意味それ以上の力を授かった事を時に恨む事もあつたが、今は感謝に耐えない。

我ながらドジな事だ。

ただ暗いだけの部屋を進んでいるうちに、ポルメリアの唇には苦笑が浮んだ。

その気の緩みを突くように、その声は彼女の耳の中で響いた。

「お気楽なものだな・・・」

一瞬の緊張とともに彼女は身構える。だが暗闇は静かで音すら吸い込んでいるかのようだ。何の気配もない。

「神に選ばれし者の恍惚と優越か。しかし私は許しはしないぞ！お前は私を、自分の師匠を殺したのだからな！」

彼女の耳に響く声は、打ちのめすように彼女を批難する。声の主は確かにグラムス・ランズベールだった。かつて属していたランキン侯爵騎士団の騎士長。彼女の剣の師。そして先日倒したばかりの、彼女が殺すべき『暴君』と化した男。剣を構えながら彼女は辺りを見回した。

ランズベールは死んだ。確かに彼女がその心臓に剣を突きたて殺したのだ。今更こんなところに現れる筈がない。

だが声は冷静にそう判断する彼女の心を見透かしていた。

「そうだ。確かに私はお前に殺された・・・酷いじゃないか、ランキン。」

私は待つてくれと言ったんだぞ？それなのに、敗者の哀願を無視してお前は、私の心臓を貫いた！」

罵声とともに突然視界が明るくなった。眼前には倒れ衰れつぽく願うランズベールの姿と、情け容赦なく剣を突き立てるポルメリアの姿があった。

彼女は思わずその光景に見入ってしまった。

「お前は私の事を父親同然だと言っていた。酷いじゃないか。お前は父親の願いを踏みにじったのだ！」

心臓を突き刺されたランズベールは、首だけは彼女の方を向いて、恨みがましく言った。

違う！

言葉にならずとも彼女は叫んでいた。それは違う、違うのだと彼女は心で叫んだ。

「いいや。違わないわ」

今度はポルメリアがこちらを向いた。青い瞳には清冽な光はなく、浮かべた笑みは残虐で、ただ殺しを楽しんでいるようにも見えた。

「これが私の本当の姿。『悪』を滅ぼす喜びに震え、命が失われる感触を楽しむ殺人鬼。」

これが私！尊き神に選ばれし、神に仕える一族と青き貴族の血が流れるこの私の上に許される至福の感覚！

そう、『悪』ならいくら殺してもかまわない。それが神に許された私の喜び！」

違う！

彼女の反論は声にならなかった。喉から搾り出されるのは、ただただ吐息ばかり。

「父殺しが！」

「当然なのよ」

恨みを吐くランズベール。高らかに笑うポルメリア。彼女はひたすら首を振った。

違う。違う違う違う！

「ランズベール、貴方はもはや私の知っていた高潔な騎士ではなかった！貴方は教えた。」

弱き者を助け、横暴なる者を懲らし、人々の為に剣を振るうのが騎士の務めだと。人々を虐げ死をもたらず貴方は、もう騎士ではない。私が愛した師ではない！」

彼女の清冽な瞳に光が宿った。その言葉とともにランズベールは甲高い高笑いを残し、消えた。

後には彼女自身の姿をしたものが、にたにたと笑っていた。

「そうそう、『悪』は滅びるべきよね」

「だが、少なくとも私は命が消える感触を楽しみはしない。これは私が背負った苦行。人並み外れた力を授けられたものの苦しみ。お前には解らない。影でしかないお前には」

彼女の目の前にいたポルメリアは笑いを止めた。

そして彼女の藍色の瞳に射すくめられ、苦しげに身もがき、やがて崩れ落ちる砂のように消えていった。

気がつくとき彼女は扉の前にいた。もはや部屋は暗闇に包まれているわけではなかった。

扉のノブに手をかけ、彼女は一瞬振り返った。

ここは幻覚の間。自分自身の疑念や苦悩を拡大して襲わせる。彼女はそれに打ち勝つ事ができた・・・今は。彼女には目的がある。この塔を支配する非道なる魔術師バラウダを殺さなければならない。その目的意識が、彼女に意識を保たせた。

だが、それがなければ一体どうなっていたのか？

グリムス・ランズベールを殺した後味の悪さ。『悪』は殺されるべきと、あやうく考えそうになる心の弱さ。

それは、これからいつでも彼女自身に襲い掛かってくるだろう。

私はそれに負けないだろうか？負ける事がないと確信できるだろうか？

それは彼女自身にも解らない。

遠くで再び甲高い笑い声が聞こえたような気がする。彼女は、それから逃げるようにして部屋を後にした。

通路を進み、階段を進み、途中いくつかの罠にかかってそれを踏み潰して、彼女は鉄格子で仕切られた小部屋の群れを見つけた。それは実験の為に連れ去られてきた人々の檻だった。死臭と腐敗臭、獣臭、異臭が充満している。たいがいのは牢は空だった。

狂った魔術師の生贄になったのだろうか。

だが最後の牢の前に足音を響かせて立った時、その隅で微かに動くものを見つけた。それは灰色髪の姉妹だった。姉はポルメリアと同じぐらい。妹は十歳ほど年下に見える。二人は怯えながら彼女を見上げた。

ポルメリアの姿は淡い光に包まれている。善なる軍神の眷属である証、天使のまとう光に似ている。怯えた姉妹の顔色が、みるみる生気に満ちたものになった。

「・・・天使さま？」

姉がおずおずと尋ねた。

「違う。だが貴女たちを助けに来た」

そう言いながら、ポルメリアは清冽な瞳で二人を射抜いた。どちらも『悪』ではない。おそらく哀れな犠牲者。元は薔薇色の頬に波打つ髪が映える美しい姉妹だったろうに。

閉じ込められ、何時殺されるか解らない恐怖に怯えて、二人はすっかりやせ細っていた。

「ここから出られるの？」

妹の方は希望に満ちた眼差しで彼女を見上げる。ポルメリアは子供好きだ。絶えてなかった優しい微笑が、珊瑚色の唇に浮んだ。

「ええ。私はこれから魔術師バラウダを倒しに行く。そしたら、二人とも家に帰れるわ」

だがそれを聞いて二人は急に意気消沈したようだった。

「無理よ。あの魔法使いはこの辺り一帯を治めているの。どんな殿様の軍勢も、どんな騎士さまも勝てなかった。

『天使』さまでも無理よ」

姉の言葉は絶望に満ちていた。それを力づけるためにポルメリアは微笑んだ。

「大丈夫。私の二つ名は『城砦落とし』。今まで何人もの魔術師を倒してきた。大抵の魔法は効かないのよ。いい？魔術師を倒したら迎えにくるわ。もう少しの我慢よ。私はきつと戻ってくるから」

「本当？きつと私達を出してくれる？助けてくれるのね？」

「ええ」

「きつと、きつとね！」

ポルメリアは二人を落ち着かせるように笑って手を振ってみせた。妹が立ち上がり手を振る。そのあとけない姿に心救われながら、彼女は先を急いだ。

牢から先は、何故か畏がなかった。執拗に設置されていた罠が突然なくなった事を訝しく思いながら、しかし捕らわれの姉妹を一刻も早く救い出す為に、ポルメリアは飛ぶようにして先を急いだ。

彼女達を救う事ができるなら、自分がやってきた事にも意味がある。姉妹の救出は彼女にとっても救いだっただ。

最後の階段を駆け上がる。迷いもなく扉を蹴破る。

踊りこんだその部屋は行き止まりで、そして広い部屋の中央には巨人のごとき大きな鋼鉄の木偶がいた。

彼女がそれを確認する前に何かが物凄い勢いで落ちる音がした。振り返れば、扉は鋼鉄の壁で遮られていた。

明らかに彼女は誘い込まれたのだ。この袋小路で巨大な鋼鉄の木偶と殴り合えという事だ。

畏と知っても彼女は怯まなかった。何であろうと障害は実力を持って排除する。

自分が閉じ込められたと知って彼女はすぐに木偶に向かって仕掛けた。

先手を取り木偶を破壊して、それから石造りの壁を突破し先を急ぐ。

捕らわれの姉妹を救うために、彼女は立ち止まる事など考えなかった。

巨大であるが為に鋼鉄の木偶は動きが鈍い。故にポルメリアの、最初の渾身の一撃は、やすやすと木偶の体を撃った。が、その手ごたえに初めて彼女は怯んだ。鋼鉄の塊を殴ったとしても、ここまでが痺れる事はあるまい。あやうく愛用の大剣を落としそうになりながら、彼女は間合いを取った。

自分の攻撃が相手に届いていない。それが彼女の感触だった。剣を交えれば手ごたえで相手がどれほどのものか理解できる。殴りかかる木偶の動きは予想よりも速かった。しかし彼女が守りに徹すれば避けられないものではない。

これは自分を殺す為の道具ではない。ただ自分をここに足止めする為の仕掛けなのだ。

そうポルメリアが悟った時だった。一瞬にして脳髓を激しく揺さぶられるような衝撃を感じた。立ちくらみを感じ、鼻から生暖かいものが流れる。赤い滴が床に落ちた。

血？では、あれは攻撃魔法の衝撃だったのか？

すかさず鋼鉄の木偶が殴りかかる。浮遊盾で辛うじてそれをかわす。同時に、木偶の頭上あたりから視線を感じた。空間の歪みのようなものが見える。

あれだ。あそこから魔術師が私を見て呪文を投げているのだ。

ポルメリアは改めて『エゲツない』と称される魔術師バラウダの力を知った。変質的な畏の設置などという事はない。いや、それを時間稼ぎに使って、彼女を確実に倒す舞台を作り上げていたのだ。

その準備が整ったから、畏を全て解除して、この部屋に彼女を誘い込んだのだろう。そして今、高見の見物で随時、彼女を死に至らしめる呪文を投げているのだ。

「やれやれ、あの呪文でも倒れないのか。脳髓が破壊されて廃人になる呪文なんだが、呆れた頑丈さだな」

ポルメリアと鋼鉄の木偶が殴り合いをしている密室のすぐ外で、バラウダは灰色の髪をかき回し、次に投げる呪文を選び出した。戦いの最中という緊迫感はない。

彼にとってはこれも実験だった。善なる軍神の下僕、天使の眷属である彼女を、いかに体を残したまま殺すか。そういう実験だった。何しろ天使などここ二百年ばかり、テッラムリアにはごく稀にしか訪れないのだ。たとえ類似品でも手に入れられるなら、天使殺しの呪文開発に大きく役立つに違いない。

「だから、殺すにしても粉々にしてはまずいんだから、面倒なものだな。木偶が間違つて粉碎しちゃうんじゃないかと思ったが、その点は安心していいようだな。しかし、はてさて、体になるべく傷をつけずに殺すには、どうすればいいか・・・」

その時、時空を曲げて開いているのぞき窓から激しい剣撃の音が響いた。それは剣と鋼鉄がぶつかり合う音ではない。肉体が鋼鉄に潰される音でもなかった。不審に思ったバラウダはのぞき窓から見る。

すると、ポルメリアは何を思ったのか、木偶に背中を向けて懸命に壁に向かって乱打を浴びせているではないか。

「何のつもりだ？一体・・・」

気が触れて勝負を投げ出したという訳ではなかった。木偶の攻撃がくると、さっさと身をよじりかわしている。そして一回り木偶を連れまわすと、また壁に向かって攻撃を仕掛けるのだ。

「壁を壊して脱出するつもりか。可愛い事を考えたな。しかしなあ」

バラウダの指が鳴る。途端に石の壁は鉄の板で覆われた。これでは彼女の力を持ってしても簡単に破壊する事はできない。

「これで更に時間がかかるといわけだな・・・なるほど！直接攻撃の呪文がかりにくいのなら、時間とともにお前さんが死ぬのを待つという手もあるか。えーっと水を呼び出す呪文はなんだったかな・・・」

バラウダは、密室の内側を水で満たしてポルメリアを溺死させる事に思い至ったのだ。

天使が水中でも呼吸できるという話は聞いた事がない。たださえ重い武装を身につけているのだ。泳ぐなどという事もできまい。何なら渦流を作り出して、溺死の手伝いをしてやってもいい。これなら傷一つない死体を手に入れる事ができる。

我ながらいい考えだとバラウダが準備を始めた頃、しかしポルメリアはまだ壁を破壊する事を考えていた。

それも、木偶の攻撃をギリギリまで待って、

自分が破壊しようとしている壁の近くを殴らせる事によって敵にも手伝わせようというのだから、涙ぐましいものだ。

バラウダは失笑した。

「そんな事では壁を破る事はできんよ。さて、水を呼び込もう。さらばだ、『城岩落とし』。

お前が壊した罫の数々、弁償はお前さんの体で払ってもらおう事にするよ・・・」

だが、呪文を唱える前にバラウダは彼女の不審な行動に気づいた。ポルメリアは狂ったように猛烈な打撃を壁に加えている。もちろん、それだけでは石の壁は砕けても鉄の壁を貫通するまでには至らない。

後には木偶の拳が近付いてくる。ところがポルメリアは今までのように、後に目がある如く行動しようとはしなかった。それどころか、殴ってくれと言わんばかりに壁を攻撃する事に熱中している。

「自棄になったか？まずいのお。これでは挽肉になっちゃいますぞ・・・」

一瞬バラウダは木偶の動きを止めるかどうか躊躇した。だが、それが全てを決めた。

魔術師の一瞬の躊躇いが彼の行動を遅らせ、そして木偶はポルメリアの背中を殴った。

無防備ではなく浮遊盾が間に入ったが、しかしまともに巨大な木偶の鋼鉄の拳で殴られたのだ。

挽肉には流石にならなかつたが、彼女に大きなダメージを与えたのは間違いない。

だが、バラウダが啞然としたのはその事ではなかつた。

彼女は殴られた力を背に受け、自分の大剣で鉄の壁を突破しようと試みたのだ。

その為に、無駄と知りながら乱打をして鉄の壁を弱めた。

信じがたい事に、彼女はそれで鉄の壁を突破して見せた。

当然までもに鋼鉄の木偶の拳を受けたのだから酷いダメージを受け、大量の血を吐き出してしている。

だがそれすら彼女には問題ではなかつた。転げるように密室から脱し、血を吐きながら素早く清冽な藍色の瞳で辺りを見渡す。そして瞬時にバラウダの姿を視界の隅にでも捉えると、もう一陣の金色の風となっていた。

「くそー」

咄嗟にバラウダが唱えたのは炎の壁を作り出す呪文だった。

最前まで準備していた水を作り出す呪文の反対を思いついたのか、

それともポルメリアが電撃や冷氣に対するほど炎には強くない事を思い出したのか。

どちらにせよ、あまり賢い選択ではなかった。

彼女は薄っぺらい炎の壁などもとせず、瞬時に間合いを詰め、渾身の一撃でバラウダの無防備な体を殴り上げた。

バラウダはうめき声さえ発する事なく天井にまで跳ね上がり叩きつけられ、そして床に落ちた。

悪魔さえも一目置いた彼の頭脳は完全に粉碎され、血溜まりができあがった。

終わった。終わったのだ。近隣の者たちに恐れられた魔術師バラウダは呆気なく死んだ。これで牢の姉妹を助ける事ができる。

手酷くやられながら、ポルメリアは満足な笑みを浮かべた。

だが終わってなどいなかったのだ。

バラウダが死んでポルメリアが気を緩めた時、石畳の隙間から何やら異様な匂いの煙が湧いてきた。

咳き込んだ彼女にも、それが毒だという事は解った。すぐに捕らわれの姉妹を連れて脱出しなければならない！

その時、彼女は背後に気配を感じた。間一髪でその拳を避けたが、そこには主を失った巨大な鋼鉄の木偶がいた。

操る魔術師が死ねば、木偶の動きも止まる。それはポルメリアの手前勝手な思い込みに過ぎなかった。

彼女を殺す事を命じられた木偶は、己の最大限の力を振り絞って、主が単なる肉塊になった後も執拗にポルメリアを襲う。

彼女にとって鋼鉄の木偶は強敵ではない。ただ倒しにくいだけだ。

彼女の大剣を持ってしても鋼鉄の巨体にダメージを与えるのは簡単な事ではないが、しかしそれだけだ。

注意深く振る舞えば相手の攻撃をかわす事は難しくはない。ただ単に倒すのに時間がかかるという事に過ぎない。

この場合、それが致命的である事は、ポルメリアにも解っていた。噴き出す毒の煙は彼女にとってはどういう事はなかった。

だが牢の中のか弱い姉妹にとっては？性悪魔術師のバラウダが、自分の死とともに発動させる罫である。

この広間だけに毒の煙が広がっているとは思えなかった。

一体どれくらいの時間がかかったのだろう。焦るポルメリアがようやく鋼鉄の木偶を黙らせた後、

彼女はもどかしげにもと来た道をとって返した。

出入り口を塞ぐ鉄の壁を狂ったように殴りつけ、やっとの思いで壊し、彼女は転がるように階段を降り、先を急いだ。

心の何処かで、既に手遅れだという声が聞こえる。階段にも煙は充滿していた。

彼女は咳き込むぐらいだったが、普通の少女の身の上に一体何が起きているのか。

彼女はあえて考えないようにした。とにかく、姉妹のもとに辿り着ければいい。そうすれば何とかなる。何とかできる！

だが、願いは虚しかった。煙で満ちた牢が並ぶ廊下を駆ける。その先に見たものは、鉄格子の傍らで倒れている二人の少女だった。

駆け寄り彼女達を抱き寄せ、思わずポルメリアは目を背けた。

そこには苦悶の末に訪れた死を呪う、歪んだ姉の死に顔と、泣きわめき疲れ果て息絶えた妹の顔が並んでいた。

ああ・・・

肩を落しうなだれるポルメリアの姿。しかし彼女は感傷に浸る事すらできなかった。

何処からか地響きがする。何かが崩れ落ちる音が、振動がする。

バラウダは毒煙だけでなく、自分が死んだ後の塔の崩壊まで仕掛けていたのだ。

ポルメリアは一瞬躊躇った。しかし二人の死体を持って逃げる事はできない。彼女は二人の顔を拭き臉を閉じてやった。

それ以上してやれる事はない。心の中でわびたポルメリアは、すぐさま自分が踏み抜いた罫の後を辿って駆け出した。

最後には崩れかけた窓を見つけ、そこから外に飛び出す。少女の高さから落ちても問題ない。

骨が折れようが、足が砕けようが、彼女は『善』なる神の加護により凄まじい速さで治癒されるのだ。

間一髪で塔の崩壊から逃れる事ができたポルメリアは、座り込み呆然としていた。

結局自分に何ができただろう。魔術師は死んだ。しかし彼女は捕らわれの姉妹を、結局魔術師から助ける事ができなかったのだ。

人々を救うのが騎士。それなのに、それさえもできなかった。

私は無力な愚か者だ。

崩壊した塔の土煙が収まる頃、砕けた彼女の骨も治癒された。汚れた顔を拭きながら声も立てずに流した涙を拭う。夕闇が迫る中、彼女はうなだれたまま歩き始めた。

私は本当に、誰かの為、何かの為にになっているのだろうか？ただ廢墟と死体の山を築いているだけではないのか？

その問いに答えられるものはない。彼女はただ次なる巡礼に向かうしかないのだ。

彼女の名はポルメリア・ランキン。

またの名を『城岩落とし』。

愚直なまでに『悪』と戦う事しかできない。その事を彼女自身が呪っていた。